

木

魚

魚

数珠玉を掌で揉みほごし

物言わぬ仏の骨がモノを言い

サレコーべ 和尚の叩く木魚かな

四十九夜 ホトケもそつと杯をだし

叩かれて 蚊を吐きだす木魚かな

数珠玉を揉みほごしおり 秋の蠅

欲深き神の馬穴の底がぬけ

原発の灯を点して墓を掘り

悪餓鬼の火あそびすぎて炉をこがし

放射線 キノコの形でつらをだし

酒を浴びて 除染するかやお釈迦さま

汚染して頭垂るるも稲穂かな

原発の村に閉じたる菩薩かな

方舟や 泥の舟にも人をのせ

原発もカチカチ山と燃えさかり

蜘蛛の糸 釈迦は切らずと人が切り

猫の尾の なにやら呪文となえおり

天の邪鬼テープの前の石となり

腕を組み 足三本の五徳かな

われひとり五徳の上に秋の蠅

神妙に悟りひらくや 冬の蠅

血を吸いし 茱萸をはこぶや蚊の哀れ

蚊柱の 経をあげたり交んだり

いななきし 闇を切りとる黒い馬

ポーフラも浮かれ木魚に浮き沈み

ポーフラの への字くの字の痒みかな

蚊柱や ベリーダンスも踊りけり

てんびんの芯をわたりて金魚売り

夏の炉の脚もとさみし五徳かな

電線にツバメかなでる音符あり

庭先の西瓜のタネと句読点

軒下に鳥のついでばむ 句読点

句読点なっとう糸がからみおり

ポケットにモノ忘れして国滅び

この国に肅々法師の蟬が鳴き

値上げする煙の環にも角がたち

赤提灯 聖徳太子が唾を呑み

そもそもの木の葉狐に騙されて

鬼火の提灯ゆれし ドジョウ狩り

竹トンボ 掌が拝みよる

座敷ぼこ 対角線をひた走る

いも虫の青みどろを足で踏み

一升瓶 すがめ眺めつ マムシ酒

火を吹きて トグロ巻きたる 仏かな

つまずきし 無縁仏に 蝶が舞い

野垂れして 人の形に花の咲き

散骨のちりぬるわが身 眺めおり

この夏の横着へチマ横になり

シャクトリの 花の咲かない小枝かな

クツワムシ 破れかぶれの声かなし

管楽器 抱きて眠る蛹かな

チヨコ色にとろりととけて地蜘蛛おり

石塀にエナメル置きて 蜥蜴去り

巻尺で獲物狩るかよ カメレオン

草むらに長虫こがねのトグロ巻き

結末は蛇がオノレを呑んでとけ

若あゆの 苔をけずりし刃物かな

竿陰をながれ過ぎにし世の眺め

品格のひとり相撲に行司こけ

草原に土俵いらすと青き龍

青き龍 飛龍となりて去りにけり

後になり先になりして 影へんろ

斑猫の小手翳しおり 遍路道



逃げ水や 浮き橋わたる 遍路かな

夏影に わが身踏まれし 遍路かな

影のびて われ宿ありや 旅遍路

彼岸花 燃えつきて なお 遍路道

骨杖に 鬼火まとわりて 遍路ゆき

メビユウスの 死の国 巡ぐる 遍路かな

地を割きて あかい血を吐く 彼岸花

黒髪や 下弦の月を手に かざし

野辺送り 弔い旗の顔を 舐め

沈下橋 逆さにゆくや野辺送り

沈下橋 あかい着物の水鏡

鬼女ありておん身雪ぐや 沈下橋

妖艶なうしろ姿の 沈下橋

ホタル来て 写経するかや水鏡

亡き門に梵字なぞりて ホタル舞い

うつし身を写して迷う火垂れかな

源平の谷にこぼるる 火垂れかな

ホタル来て 芳一おるかど耳に問い

夜もすがら 耳に灯りし螢かな

琵琶法師 びわの形で琵琶を弾き

言魂に死霊とり憑く 浮き世かな

カワガラス 浮き世の水に浮き沈み

香あげて 白き骨おく蚊遣かな

白骨を巻いて香焚く 蚊遣かな

渦巻きし 骨を吊う蚊遣かな

重カも骨の形にこしを曲げ

指折りて おすびひらくや二度わらし

いやはやも 羽織袴で人となり

恥じらいを透かしてほてる 耳提灯

またしても ハンメルンの笛を吹き

錦鯉 水におよぎし絵筆かな

青い空 鯉の姿に風およぎ

揉み手して飯を欲しがる 五月蠅

ミズスマシ ののじののじの日和かな

のどけさや 煙管くわえて田螺おり

尾の切れたオタマジャクシの腹おどり

カメムシの甕に詰まった匂いかな  
泥水に鰓をすすぎし鯰かな

交わりて 蛇のよじれしメ縄か

かなかなと 蟬のまじわる句会かな

捕虫網 かおに冷たき蟬しぐれ

油ゼミうなじに汗の滲みおり

垂直に午睡むさぼる やんまかな

斬りむすび 花に落ちるや蝶吹雪

道行きの 月も小枝に腰をかけ

まなじりに桜の花の 吹きだまり

花冷えや 小用すみたる身のふるえ

谷川の写りし月を 獣噛み

影踏みの わが身いずこや 朧月

影法師 おぼろ月夜をさ迷いて

凡骨の 獵師となりて 言葉狩る

耳尖げし 闇夜の空に 鶴の啼

影ふみの 影ふむ足を影踏みて

あるじなき軒の風鈴 雪しぐれ

とろとろと思念するかや冬の蠅

三脚に環をあげて待つ五徳かな

ご破算にねがいましたる資本主義

西風は肌にあわずと浚団扇

沖繩の鏡のごとき照りかえし

静止して二律背反 独楽のたち

箱男 円い地球を踵でけり

眺むれば言葉はこぶやのど仏

百舌去りてはやにえさみし冬の空

寒空にオトギの国の鵲の啼き

孤をひいてわが身捨てるや冬の星

だまし絵に騙されてなお草なびき

片足を差してこの世の景色かな

ギンナンのあやしきものの匂いかな

馬の穴眺むるほどにモノの落ち

風上ではならぬと鼻が言い

つんつるてん 下弦の月を頭にさし

垂れごろも脱皮そこねの子等のゆく



風呂敷の唐草もようが 児をさらい

モノ忘れ 腰のあたりのつむじ風

年輪の等圧線に指で触れ

鎮座する いれ歯に骨の箸を置き

正月を迎えし蠅の 灰神楽

めでたさも 灰神楽して冬の蠅

ちんちろりん 春をよびこむ 罨瓶かな

そもそもの 墓にはみでる 骸かな

夜のふけて 除夜の声きく 終の蠅

脱原発元年

二〇一二年四月

高知県高岡郡四万十町

大正中津川二一〇の一

佐々木 泰